

昭和初期岐阜県に於ける木工による手工教育の実際（Ⅱ）

Fact of Handy Craft Education in Early Period of Showa Era Gifu

齊藤 暁子*・富岡 卓博**

キーワード 郷土化教育 岐阜県木工教育 飛騨版画

はじめに

昭和初期手工教育が、確かな技術指導を通しての生活理解やものの考え方を教える現実的役割と、単に職人の徒弟制度の中での技術の伝達とは明らかに違う、より創意工夫を大切にしたり、教育的で子どもの表現に寄り添う形での理科的木工の実際であったことがわかってきた。

本論文を進めるにあたって、岐阜県の農村更生の実業教育としての新たに実践家を取り上げていく。加茂農林の長尾和男である。その実践とともに、山下泰助の実践や、中西忠節の手工教育としての版画教育の実際、戦時下での手工室での兵器製作、といった岐阜県で行われた郷土化教育の中での手工教育変遷と位置付けの考察をすることで、岐阜県の木工による手工教育の実践の全貌をみることがこれから可能になるであろう。

「農民美術」としての山本鼎の手工・工芸に対する考えや、「民芸運動」、「創作手工」などの流れを『工芸』という当時の雑誌の寄稿文からも考察する必要がある。また、『教育研究』の中での諸教育大会等の記録から、岐阜県の実践家や青木実三郎ら地方の実践家や諸研究者が、各地で確かな郷土化教育の理解と優れた教育実践力によって戦争でかき消されながらも確かなムーブメントがあったと推測され、実践者と理論との出会いもとらえなおす事が可能だと考えられる。

I 郷土化のなかで手工教育が目指したもの

I-1 「教育の生活化」における郷土教育の展開

日本人が「日本的」芸術に気づき、単に生活者を守る日本尊重ではなく、独自の視覚文化を生活の中で認め始めた時代が大正の「民芸運動」¹⁾の中に認められる。その価値は、自らが立つ文化を視覚的にも過程的にも理解していく重要な要素があると考えられる。そしてこの時代は、農村更生として「農民美術」を各地でうたった時代でもある。²⁾ その中でも、版画家山本鼎が信州に展開した農民美術運動³⁾は、有名なところである。「民芸」「農民美術」どちらも「人々の生活の美的豊かさ」についてアプローチした、わが国の手工教育の変遷を語る上で、その背景にあるものづくりに関わる大きなムーブメントであった。次第に手工教育が盛んに進められた背景には、森有礼の意向⁴⁾を脈々と受け継ぎながら、文化の再認識のデモクラシー、プロレタリアなどの思想が作用していなかったのだろうか。と筆者は、当初考えたのである。しかしむしろ、体制に近い、産業に密着したところで、農民の生活、日常に目を向ける啓蒙活動として、二つの活動は捉えられ、農民の生涯教育の形での存在が大きい。教育は教育の体制の中で独自に発展していたと考えられる。しかし、互いが同時代に並行して活発化した要因は、「郷土化」という地方を開発する地域主眼の考え方にあるのではないだろうか。地方・地域の活性化が、しいては直接国民を満ち、富国そして郷土を愛し、強兵に導くという体制の考えに飲み込まれた形で進んだのである。白樺派が具現しようとした「ユートピア」のように交流のない独立した形では消滅してしまうが、流通しながら成長を図るには、きっとこの「郷土化」の方法論は、政治も含めて産業も含めてのユートピアを教師達には、実現可能に想定できたのではないだろうか。

* 岐阜県郡上市立牛道小学校 ** 岐阜大学教育学部

当時の体制化での教育の流れを「教育の生活化」の意味の変化で追って、郷土教育と図画教育の関係から著わす。

政府は大正末から、昭和初期にかけての深刻な農業恐慌に対して「農村の自力更正」政策を打ち出し、文部省はそれと結び付けて「郷土教育」を採用した。ここでの郷土教育は「画一化の打破」「教育の実際化」「教育の地方化」を主旨とする。文部省及び各師範学校は、これによって郷土愛を育て愛国心を育てようとしたのである。これを主観主義的郷土教育という。

ここでは、郷土を主観的、心情的次元で捉えているところからこう呼ばれたのである。換言すると郷土教育は、「労作」「体験」「直観」同様に、学習方法上の一つの原理とされたのである。

他の一つは大正期の民間運動の流れの延長上にあるもので、特に地方の教師達によって支持された客観主義郷土教育である。

郷土愛や愛国心では克服しようのない農村の窮乏を目の当たりにしていた教師たちは、郷土を心情的愛の対象ではなく、真実の生活を捉えるための教材としたのである。

そして全教科で主観主義郷土教育を行うとした文部省に対し、客観主義郷土教育の支持者達は、郷土科の特設を主張し、独立した教科としてこの教育を実現させようとした。しかし、次第に強まる日本精神の強調を求める教育の流れの中で、愛国心教育の有効な手段として変化していくのであった。

この官民二つの流れに共通するのは「教育の生活化」というテーマであった。そして官側ではこの「生活」を、心情的・抽象的に捉え日本主義教育の一つとしたのに対し、民間運動の中での「生活」は、実証主義的知識の対象として、あるいは又、社会科学的に捉えられるべきものとして考えられ、その教育実践が展開していくのであった。

教育の生活化/学校教育を「生活教育」とする考え。「生活教育」の特質は、教育における権威主義、形式主義、知識の注入を排除し、子どもを主体的な生活者として、教育のあり方を考えるものと、教育を知識の教授に限定せず、実生活から学び生きて働く学力の内容を追及しそれを身につけるものとする二つがある。前者は経験主義に立脚する教育、後者は生活現実に挑戦する民主主義教育の基本とされる。

主観主義郷土教育としての図画教育について、さらに言及する。

霜田静志は、学校美術協会から昭和6年に出版された「郷土化の図画手工」で、「郷土教育こそ局面を打開し、いき詰まる現状を開拓すべき新思想である…」⁵⁾ というが、事実、図画教育では歓迎されたと考えられる。というのも、当時の図画教育者の大多数が参加したと考えられる。

山本鼎一人が、

「僕の期待する郷土教育はリアリズムを指導精神とするものです」「リアリズムの絵心で事物の特質、特性、特風、を認識せしめ、構成、構図、描写の技術を通じて、それを鮮明に表現せしむることが要領であります」さらに「リアリズムは自由主義とも個人主義とも提携するものですから、時論に謂ふところの郷土教育と、僕の思想する郷土教育とは或は、千里の差があるのかも知れません」⁶⁾

政策的「郷土化」教育が、自分の考える図画教育と相いれないものがあると警戒するが、他の執筆者は皆これに賛成している。

板倉賛治の郷土教育の理解も、先に述べた主観主義的郷土教育の範疇に属するものであった。

郷土教育は「教育の態度、様相の変化であって、教育の目的或いは本質的内容には何等の異変もなはずである」「郷土教育の持つ改革の要領は、従来の教育を郷土中心の実際化を主張とする教育に方向展開するといふにつける」と理解し、その目標については「郷土文化、郷土美への理解が深められる時、やがて郷土に対する愛慕が生まれる。そして郷土愛から郷土精神の涵養へ導かれるものである」「郷土美の正しき認識、郷土文化の理解力の増大と勤労の美德と修養に帰着する」とした。⁷⁾

このような考え方は、他の図画教育者においてもほぼ一致していた。

例えば、農村図画教育の実践者として有名な青木實三郎は、「状袋の中紙、箱から剥ぎ取った小紋紙、包み紙乃至手工紙を買い集めさせ、それを指尖で裂き取って面白い作画をやらせた…仔の此の反抗運動が熟して大正10年頃から図画の郷土化運動としてその旗色を鮮やかにするにいたったもので」⁸⁾と、図画の郷土化運動を説明している。

教育の生活化は、国定教科書「小学図画」、及び、国民学校令下における「エノホン」等を通して具体化され、又、民間においても「学校美術協会」等による研究を通して図画・手工教育の生活化が発表されるのであった。⁹⁾

この郷土教育による教育の生活化は、さらに、生活画や生活つづり方、生活版画などによってよりリアリズムへと進化していく。¹⁰⁾しかし、手工科においては、想画や生活画などにみられる感情と知的融合の中から敬称が生まれるといった、つきつめて生活を直視する思想には近づけなかった。むしろ、産業につながる、建築、デザイン・構成へと近づいていったのである。

前稿で述べた中西や山下ら飛騨の手工教育実践者が、山本県の農民美術運動に影響を受け、県の時代や地域よりも、地域の産業をベースに環境として持っていたこともあって、ある程度の教育成果としての形が見られた。その後、中西が、戦後、版画教育に携わって、リアリズムへ向かった時も、図案化し産業に還元していった。その発想は、手工教育と同様に、脈々と郷土化による人間教育を実践し、生活の中での実践者独自のリアリティを確立していたことがわかる。言い換えると、この地域の子ども達にとっての必要な力をつけることで、子どもの生活自体にリアリティを持たせる学習を地域の中で展開していく。そのことで郷土観や郷土愛を育てていく教育姿勢を一貫して持っていたということである。

Ⅱ 岐阜県の手工教育に於ける郷土化教育実践

Ⅱ-1 加茂農林学校の木工による手工教育

ここでは、昭和初期岐阜県加茂農林学校教員であった長尾和男の実践を取り上げる。

長尾和男は、日本木材工芸協会、京都帝国大学農学部、丸三書店、昭和8年号、昭和10年号へ投稿をしている。その投稿論文『作業教育的に見た木工』からは、当時長尾が木工による手工教育を通して行いたかった、身体的作業による教育を重要視する実践姿勢がみることができた。

『日本木工藝』という機関誌は、京都帝国大学農学部木材工芸研究室を中心とした「日本木工芸協会」から発行されている。この協会を立ち上げていた加藤正育の、「農山漁村の副業としての農村工芸」(昭和8年寄稿)から当時の教育を取り巻く情勢を感じ取ることができる。加藤の考える木工芸観には、『民藝』にも寄稿があるが、当時の「民芸」の観点からは程遠いものづくり観があるのである。

木という地方の産物を最大限に工業化、産業化によって生かし、農村更生につなげていきたいという理想視点がある。長尾もその考えを強く取り入れている。

しかし、特記したいのは、長尾の考える教育課程の中に、「一人一研究・自己訂正・互教育」など、生徒の自発的自主的学習を促す教育観があったこと。また、初等教育、中等教育における手工教育充実への言及「正確な知識と技術」を自主的に学び生活につなげていく指導課程の工夫があったことである。

長尾の尽力により、加茂農林学校には、600円の実業教育費国庫補助が昭和9年に支給されている。それは、¹²⁾農村工芸施設という木工

表1 実業教育費国庫補助内訳¹¹⁾

府縣	管理者	學 校 名	備 考	補助金額
茨城	縣	茨城縣立小湊農	農林産加工施設	800円
富山	市	市立富山工業	木材乾燥施設	4,000
石川	縣	石川縣立津幡農産	冬期及雨天ニ於ケル副業的教育施設	1,000
長野	縣	長野縣立下伊那農	農村牧畜工務施設	800
岐阜	縣	岐阜縣立加茂農林	農村工芸施設	600
愛知	縣	愛知縣立安城農林	動力木工施設	1,000
京都	市	京都市立第二工業	薄板積付設備	2,000
鳥取	縣	鳥取縣立日野農林	林産加工設備	700
徳島	縣	徳島縣立農林	農村工芸施設	800
香川	縣	香川縣立工芸	鋳造及噴霧鑄造漆澤乾燥装置設備	4,500
福岡	縣	福岡縣浮羽工業	木材乾燥室設備	2,000
計		11校		18,200

芸に関する設備の補助として使われた。補助支給学校全111校中11校が木工に関する国庫補助を受けた。その報告の意味もあり長尾は学校紹介として加茂農林木彫部を更に詳しく紹介している。¹³⁾ 実際に農村民の生活向上を願って行われた木工による手工教育実践を見ることができる。

地域の新副業として、人形などを作り、観光地などで売っていたという活動が記されている。また、「又近時海外へも『日本の風俗人形』として日本の風俗・国情の宣伝のために着々と進出しつつある。我が校に於いても昨年満州国執政府に献上御採納を得、今年大連の満州博覧会百点を出品し、又南米ブラジル、北米ニューヨークにもそれぞれ出荷し進出を企てている。」¹⁴⁾ と活発な進出状況を著している。農山村にある農林学校として、実業教育をすすめ、農山村においての副業を地域に広めていく使命を持って実践していたようである。

特に「E木彫教授の概要」として、「(1) 一人一研究, (2) 自己訂正, (3) 互教法, (4) 勤労, 徹底的な勤労, (5) 構成創作, (6) 作業進行表, (7) 製作予定表」と、項目を分けて自己の教育実践を教育的にまとめたことが窺える。そして、互教法では、生徒同士が教えあう教育課程を設定し、ただの教師による技術伝授だけでなく、より教育効果が上がるよう、集団学習のよさを生かしているといえる。また、一人一研究、自己訂正などの重視によって、一人立ちできる人間教育をうたっている。

高山西小学校の中西忠節の作業教育方法にも共通する点が窺える。「勤労, 徹底的な勤労」という書きぶりからも、決して今日のような温かい教え合いというよりは、技術習得や作業姿勢に対しては、厳しく指導にあたっていたことが推測される。

更に長尾和男は、論文で私見の一端としながら、自身の実践について考えをまとめている。

木工による手工教育は、「作業教育に見た木工」¹⁵⁾ として、健全なる身体をつくるという点でも、品性陶冶の方面でも美術創作心の育成の面でも非常に価値があるとしている。従来の知識偏重の学校ではなく、職業に必要な基礎的態度を養うのに、木工による作業教育は最適としている。そうした一方で、まだまだ手工教育を取り巻く現状は厳しく、「結語」に¹⁶⁾,

我が国教育實際界の現状をみるに初等教育に於いても中等教育に於いても近来手工教育の必要が提唱するに至ったとはいへ未だ実践に進んでいないのは甚だ遺憾である。即ちまだまだ多くの教師が手工労作を御義理的に行ひ木工の時間に労力を費やすよりも上等学校入学試験のための算数問題の暗記や漢字の書取に主力をそそいでいる小学校の現状であり、中学校に於いて実務科を置き木工を課している学校に於いてすら教師は甚だ厄介視し生徒の空気も従来へ偏知弊習の惰性によって甚だしく軽視しているの現状である。

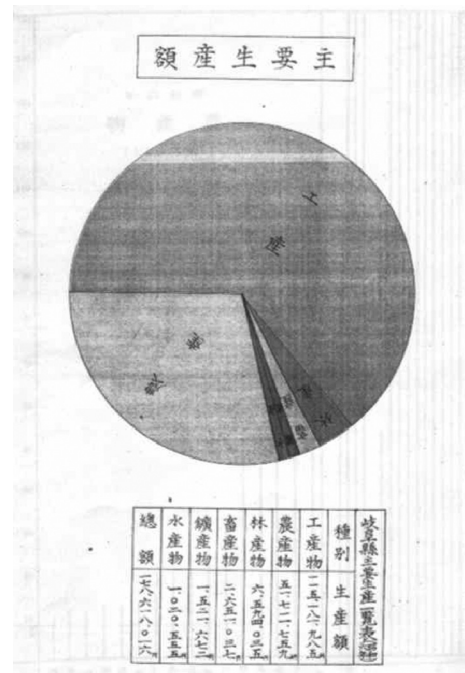
と、当時の実践者の苦悩を窺うことができる。

ここで引用にした『日本木材工芸』には、「岐阜堤燈」についての調査研究も載っており、全国の地域の手工芸に対する技術の般化は当時から注目されていたようである。

II-2 当時の岐阜地域の木工芸産業の歩み

大正・昭和初期の木工芸は主産業としての発展が望まれ、人材も機械も開発投入されていたことがわかる。¹⁷⁾ また、その土地の素材を加工し、流通させ産業化していくことを目標としていた。岐阜県でも例外でなく、『郷土教育年鑑』¹⁸⁾ による当時の産業についてみると、表2のようになり、工産物が6割¹⁹⁾ を占めている事がわかる。

その内訳として、織物、陶業、紙業、そしてその他の工業



図表2 岐阜県の産業

として、傘や堤燈、刃物、大理石細工と並んで、一位細工が挙げられている。特に、「漆器製造調」をみると以下の表のように大野郡の主産業を為していることが顕著である。芳賀登が「山の民の民俗と文化」²⁰⁾の中で引用しているが、「高山市は、昭和九年高山本線（岐阜—高山）が開通して以来、産業も急速に発達し、とくに木材と木工加工業は主要産業として市の財政を支えてきた」²¹⁾のである。神岡の鉱山の資源の流通や、蚕による生糸の流通も、それまでの高山市の財政源となっていたが、商売の範囲が広がることに伴って、量的にも農業の副業というよりは、独立した工業生産流通として、たくさんの職人・工夫を需要していたのである。

こういった流通の広がりや、大量生産化の波は、全国各地で起こっていったと考えられるのが普通である。今までのように地方ごとにある程度自立した経済圏より、企業による各地の工場設立や、軍需産業、地域の物産を流通できる交通機関の整備によって、米だけに頼っていた農村部の不安定な生活を自力更生させる運動とあいまって、地域で立ち上げられる手工芸への期待度は高かったのであろう。

Ⅱ-3 戦時中岐阜県高山市の木工芸産業の変化

飛騨高山には明治期及び大正期に、既に曲げ木²²⁾の技術があり、全国でも指折りの技術の家具職人がいたという。そんな会社のひとつに「飛騨産業」²³⁾がある。当時を知る葎原基²⁴⁾が、家具職人を目指す専門学校生²⁵⁾に講演した中で、昭和初期の飛騨産業の仕事の変化を話した。葎原は、戦時中昭和19年1月9日、新潟県上越市から木製家具製作を目指して、飛騨高山に来た。時勢もあり、家具の注文はそんなにはなかった。当時埼玉県春日部にロシアのミグ3型戦闘機が墜落し、すべて木製で制作されていることがわかった。日本軍は、早速、タチカワ飛行機、富山プレア飛行機、高山航空機工業に、木製戦闘機の開発製作を命じた。資源のなくなってきていた日本軍にとって、安価な木材によって戦闘機が作れたら、これは願ってもないことであった。しかもそれは、特攻隊の乗る戦闘機として考えられていたのである。

富山では、既にプロペラや、翼などを作っていたので、その技術は高かった。高山では、従来はジュラルミンで作られていた胴体部分とタンク類をつくっていた。曲げ木で合板を一直行に螺旋にはいでき、強度を作り出した。また、乾湿の技術で厚さ2mmのジュラルミンと同じ強度を木製8mm、15mm、20mmで実現し制作したという。

曲げ木によって自在に空気抵抗の少ない流線型を出し、漆を重ねて、均一に強度を持った軽い燃料タンクを作ったという。サイズは250 l、300 l、400 l (㍓)であった。終戦の年に完成し、一度の試験運転の後、GHQによって焼却処分となった。実際戦闘用として使用されなかったことは、幸いであった。空襲に遭うことなく深い山間部で生産できるという利点もあったが、ここには確かな高い技術があったということが、匠の時代を受け継いで続いていたことも伺えるできごとである。

実際、葎原基も「家具を作りに来たのに。」と回想するものの、時代の中で、タンク作りの中心を担っていたのである。終戦当時まで高山の小学校工作室などで、様々な木工機械は、こういった軍需作業に使用されていた。子ども達も部品を作っていたという。

当時の小学生の手工授業の中でグライダーや戦闘機の模型がかなり精巧に作られていた。玩具としてというより、工業的な意識が非常に強い教材であった。

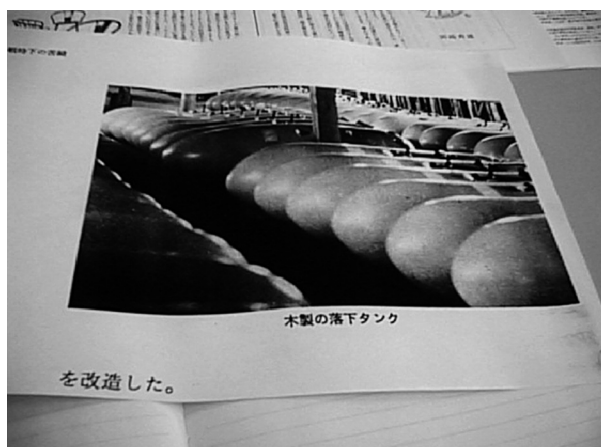


写真1 木製落下タンク

II-4 終戦時岐阜県高山市の木工芸産業の発展 (飛騨産業のあゆみより)

戦後まもなく飛騨産業はGHQの発注で、「デペンデント ハウス—連合軍家族住宅—」の折りたたみ椅子や各種家具を製作した。高山に於ける家具の大量生産レートは、ここから始まったという。この折りたたみ椅子は、合板でつくられていた。手にしてみるとかなり重いものであった。両手でしっかり持たないと持ち上げられなかった。しかし合板は、曲木を施しやすい利点があった。背もたれや座面に緩やかな曲面を施し、座り心地もよく、たたんで重ねられる形体が実現した。その後しばらくして昭和23年にスチールパイプの軽い折りたたみ椅子が普及してからは見ることはなかった。このGHQの仕事で会社は大きく生産形態を変化させることになる。

戦後大量生産によって、飛騨産業では、アメリカの豊かな家庭のダイニングをイメージした様々な家具をデザインし、大量に全国の家に向けて供給しつづけた。理想の家庭を思い描いて一戸建ての大家族だけでなく、集合住宅に住む小家族向けの物もデザインし制作しつづけてきた。²⁶⁾ 葭原基は「ヒット商品とデザインの模倣」という題で文章を残している。

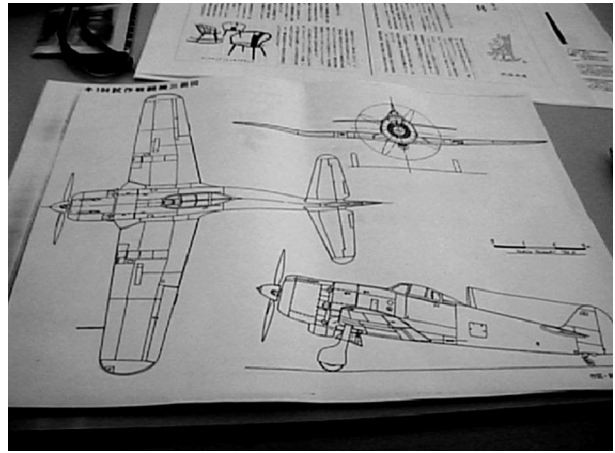


写真2 キ106試作戦闘機作三面図

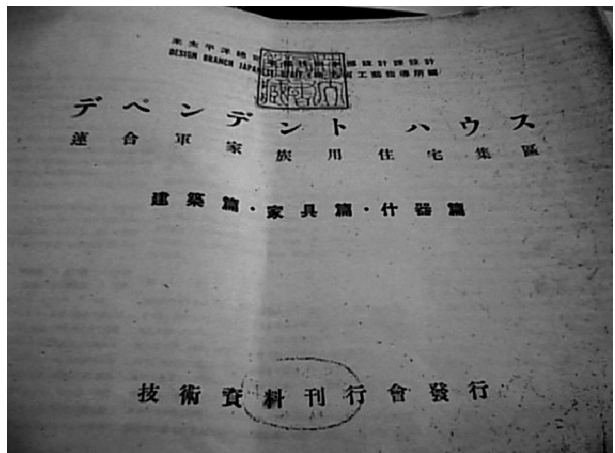


写真3 デペンデント ハウス資料

わが社製作の食堂イス#717が、昭和36年に発売されるや、その6ヶ月位経過したところから、他者による模倣のイスが多く生産されはじめ、現在では日本国内至るところで生産、販売され、このタイプのイスが全国を風びするようになった。

この食堂イスが展示会において最高賞をとり発売されるや、まってきたとばかりに、そのものずばりの寸法で模倣生産され、市場に並べられている。模倣品は必ず本物より安価で、粗悪である。

北欧の人達は、東洋的な要素を大いに学んで吸収してそれを自分のものとして消化し、更にそれを前進発展させてうまくまとめている。

日本人がするものまねは、そのものが売れるとなると全くそっくりそのまま、同じものを作る場合が多く、まったく道義心の欠如といわざるをえない。安易な他者の模倣や、場当たりの思いつき程度では発展もなく、長続きはしまい。日本の家具メーカーは、もっと独創的なデザインポリシーを確立してほしいものである。単なる形だけのものまねで、生活用具としての家具となり得るわけがない。デザイナーは一貫したパーソナリティ・デザインを保ってゆくことが、真のデザイナーの務めではなかろうか。またデザイナーは徹底的にデザインを追求する、粘り強さが必要であり、ある程度までまとまると、それで事足りりとして満足する、これは戒めるべきである。

家具のデザインは、オーダーのものより、量産されるもののデザインが本当のものではないだ

ろうか。²⁷⁾

大量生産者の一助を担いながらやはり職人としての追求が感じられた。「日本人の使用する、日本的な食事イスを作ろうと企画され、素朴で樹の持ち味を十分に生かした、あたたか味のするものになりたい。伝統的な日本美を表現したい。使いやすく、多くの消費者が喜ぶもので、丈夫で量産に向く構造にしたい。商品価値の高い、生命の長い商品にしたい。などの要求にこたえて、」²⁸⁾ デザイン開発されてきたことがわかる。

Ⅲ 戦後の中西忠節の実践

Ⅲ-1 版画教育・子ども会活動を通しての郷土教育の理念

中西は、前述したように、版画教育に尽力したことが、主な業績として各方面で知られている。その教育は、高山西小学校訓導時代に生活版画に出合ったことに始まる。ここでは、手工教育、版画教育そして、退職後も子ども会活動に取り組んでいく中西の実践を支えた一貫した教育観を探りたいと考える。

飛騨の教育版画については、岐阜県美術館で「飛騨の今昔」として飛騨の作家や造形活動を扱った企画展の中で、改めて紹介された。特に、「飛騨における版画教育の変遷」に詳しく著されている。²⁹⁾

飛騨の教育版画の発生は、1920年高山男子尋常高等小学校(現在の高山西・東小学校に分かれる以前)の尋常科6年生担任の武田由平³⁰⁾と間吉三郎による木版画の年賀状の授業から始まる。武田は、山本鼎の農民美術研究所を訪ね、感激し、次の2学期から図画の中に版画を取り入れていった。昭和9年には全県下の図画教師の前で、工芸の教育、創意工夫の教育としての「版画」の授業を公開した。武田は、中学校の教師の資格を取り、大分県に転任し、高山市を去る。しかし、岐阜県との交流は続く。1935年に「版画講習会」において、講師として地域教師に技術指導をした。

1937年には、「ひだ版の会」の手作り版画集『版丞』が創刊され、講習を受けた熱心な教師によって活動は広がっていった。この時、中西は高山西小学校の訓導として参加している。沖畑康子は、「飛騨における版画教育の変遷」の中で、次のように当時を追っている。

終戦を迎え、新しい民主主義の教育が始まったが、混乱はしばらく続いた。こうした中で、自主的な教育運動が始められるが、まずはじめに、作文教育運動が活動を開始した。それは文集制作を促し、其の文集の表紙やカットに子どもたちの版画が使われた。そしてまもなく文集のカットから、作文と同じく、子供たちの生活を表現する絵画として発展した。

1951(昭和26)年3月、山形県元山中学校生徒の版画文集『炭焼き物語』が、『暮らしの手帖』第14号、『作文と教育』に紹介され、1952(昭和27)年7月、本県中津川市東小学校児童の版画集『夜明けの子ら』が発刊されて、大きな反響を呼んだ。

その年の8月、中津川市で「第1回日本作文教育全国協議会」(日本作文の会主催)が開催された。その時子どもたちの版画作品と中国現代版画の作品の展覧会が同時に開催され、夜には版画教育の座談会がもたれた。座談会に出席した約100名が、前年12月に発足した「日本教育版画協会」の会員となり、各地に戻って版画教育を広めていった。指導者たちの悩みには、「日本教



写真4 版画の授業風景 (中央が中西)

育版画協会」や、1952 (昭和27) 年5月に発足した「創造美育協会」などが、版画の実技講習会などを開き、応えていった。また、「日本教育版画協会」は、機関紙として、教師用の『教育版画』(1952 (昭和27) 年9月)と子供用の『はなが』(1952 (昭和27) 年12月)を相次いで創刊し、版画の普及に努めた。³¹⁾

このように、子どもの図画は、生活や郷土に密着した作文や版画で描き出す、生活現実挑戦する民主主義の基本としての教育の生活化がおこっていた。

このころから中西は版画教育にのめり込んでいく。1955年 当時高山市第一中に在職していた中西は、「第2回全国版画教育大会」の、「カリキュラムについて」のパネルディスカッションで、パネラーとして出席している。また、1955年には、飛騨教員養成所で版画指導を行っている。1959年には、第5回全国版画教育大会が、高山市第一中学校で行われた。1957年、岐阜大学の坂本範一によって高山市第一中学校の生徒らの作品が『みずゑ 18 白と黒のよろこび—飛騨の子たちと木版』が美術出版社から出版された。翌年、坂井と中西編纂の『HIDAHANGA』が同社から出版され、「第10回国際美術教育会議」の折、紹介され、子どもの版画は、ヨーロッパ各地で巡回展された。

その後、実用デザインとして郷土の産業と観光に役立てようという手工科実践当時の郷土化の教育に、構成的な図案の教育を取り入れている実践が展開されていた。

この「子どもの作品の産業化」は、土産物ののれんや、手ぬぐい、浴衣の図柄、弁当の包装紙、または商店の包装紙など、広く大量に扱われ、消費された。デザインの扱われ方は、独自の「子どもの美」が趣として楽しまれたというものではない。高い技術や、デザインの確かさ、郷土の特徴や名所、自然の植物の図案化によって、産業の趣向に合っていた意匠であったからである。学校教育と地域のニーズ、そして子どもの興味は、ここでも必然的に重なっている。地域が子どもの活動を温かく見守る。といった関係ではなく、学校の1教科が積極的に地域と関わっていく重要な社会構成の中にあつた。

こういった、確かな生活の中での学力獲得の姿勢は、高山市第一中学校の教育に浸透していった。その現われとして、面白い記事を見つけた。実業への思いから、教師達が、教材用に当時高価であった自動車を購入したという話題である。

中西は、版画教育に尽力し、退職した後、幼稚園園長を務め、子ども会活動の自治化、また青少年健全育成に活動をつなげていった。つねに彼の心の中には、地域と、産業と、そこに生きる生活者としての子どもが中心であった。山本鼎の農民美術運動を理想として、武田由平の



写真5 『みずゑ 18 白と黒のよろこび—飛騨の子たちと木版』



写真6 中西の切り抜きより

版画教育と探究心を学び、生涯学習を展望した学校教育の中で、人間の育成を実現し、子どもの文化を世界に広げていった。美術も社会も教育も、リアリティを持った、生活や地域文化を見つめるものであったのだ。芸術の社会性こそ、教育や近代の再生の糸口ではないかと、強く思う実践であった。彼等手工教育実践者、版画教育実践者は、地方に住んで、地方を未開の発展途上の土地と考えていたのではなく、自らが地方観を立ち上げていく内面に郷土愛があふれていたのである。だから、政府による郷土化の教育推進の中であっても、農民更生の政策の中にあっ

ても、直接的な教育の地域生活化していくイメージを具体的な方法で、子どもにも地域の人たちにもわかりやすく、実践を押し出していったのではないか。そう考える。勿論、同時代でもプロレタリアに向かっていく実践もあり、その違いを論じることは、重要であるが、ここで扱ってきた手工教育や、版画教育は、体制を素直に受け入れ、地方独自の文化を育てる使命のみを強く感じた。

(Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ 文責齊藤)

Ⅳ 岐阜県師範学校附属小学校の木工教育の実際

県下訓導協議会発表記録『図画ト手工』

岐阜県師範学校附属小学校 昭和8年2月20日発行の第23回県下訓導協議会³²⁾発表記録『図画ト手工』³³⁾から、当時の岐阜市にあった小学校の木工教育の取り組みの実際をうかがい知ることができる。全123頁からなる記録輯は、大きくは図画科教育と手工科教育の二つで構成され、手工科は大半の85頁を占めウェイトが置かれていたことが想像される。この項では、その記録輯のうち、特に手工科教育について、また、さらに本稿の課題である「木工」の領域に焦点を当てた分析考察を加えることとする。

昭和8年の頃は、昭和維新が叫ばれ、国家的な政策が濃く反映された時代背景の中で、様々な分野で「改造」がキーワードとなっていた。「郷土化」もまた同様に領土拡大と連携していた部分もあると思われる。図画より手工が重視され始めるのも、単に、児童の側からの必然性とは言えない。家庭生活における実用的な視点だけでもないのは論を待たないところであろう。

タイトルに、「生活に基調する手工科系統案」手工部研究部、とあるように手工科設置の基本理念を児童の生活に置いている。本書の巻頭の同校小学校主事山崎久蔵による序文中に、第1章手工教育の生活指導への動向…文責；伊藤又一郎とある。また、第3章系統案編成の経路は「文責；坂本数治」、第4章手工科系統案は「文責；坂本数治」と記されていることから判断すると、伊藤又一郎と坂本数治の二人の人物が手工科の運営にあたっていたとみることができる。

本稿の冒頭Ⅰで示した、昭和6年発行の文献『郷土化の図画手工』のうち、指導編の最後の執筆者が岐阜県古川小学校山下泰助であることは前述したとおりである。すなわち昭和8年発行岐阜県師範学校附属小学校県下訓導協議会の2年前からすると、伊藤、坂本は、山下の郷土的取り扱いを強調する内容を同県人として読んだりしている可能性は非常に高いと思われる。また、その時代の各県師範学校附属の訓導は、夏期その他、事あるごとに県下の訓導を指導助言する任をもって巡回していたことが、『岐阜県教育』の記事等から分かっているが、そうしたことから何らかの接触があり、互い



写真7 中西の切り抜きより

に影響し合っていることも推察される。

さて、伊藤又一郎の文責文中に「郷土化」論に関わる注目すべき記述が載っているので次に示す。

手工教育は大人の概念や観念によって構成された画一の教材を児童の生活に無交渉で無理に模倣せしめて、生命のない単なる技巧の練習に終始したのである。そして児童も亦殆んど何等の批判も独創も自己生命の表現もなく教師の云はるるが儘に学習していたに過ぎないのである。

斯くの如き機械的強制的学習に依っては如何に教師が努力せようと児童の十分な成長と自由創造性発展を望むことは出来ないのである。其の上教材本位の画一的手工は甚だしく結果の巧利に陥り、児童の趣味と創作を裏切ってしまった。今後の手工教育は児童の生活表現を本体とし児童の自己活動を基礎として、児童生命の本質的發展と表現とをもっともっと重んずる創造的的手工学習たらしめねばならない。(中略) 新教育に共通の主張は『児童の発見であり』児童の発見は児童中心主義となって…

と、郷土化論の解釈を児童中心の生活への転換としている。

坂本数治もまた第3章系統案編成の経路の中で、手工教育観の確立について、

仰々手工教育の方途は法令が示している。けれどもそれは大綱を示されたもので単に骨格を与えられたに過ぎない。この骨格に肉を付け、血液を送って活力を与へるのが實際教育に当たる私どもの努めだと思ふ。即ち現代の教育思潮を考へ、土地の状況を察し、学校の事情を顧みて此の法令を個性化すること、いひかへれば手工教育観の確立!これこそ系統案編成の第一歩出なければならぬ。(傍線筆者による)

坂本は実務能力が非常に高い人物であるが、同時にこの記述にあるように信念の強さも備えていることがわかる。「法令は大綱をしめしたもので骨格・・・」、「法令を個性化する」といった表現は驚きである。それにしても、伊藤と坂本が附属小の手工科の両輪であったことが、これらの高い見識からもうかがえる。

次に、岐阜県の手工教育の實際を理解するために、さらに発表記録『図画ト手工』の内容構成と手工学習計画の具体的な授業案部分をみることにする。

第1章の手工教育の生活指導への動向は、伊藤又一郎が「伝統的の教育概念を検討して、あるべき手工科の使命を凝視した結果…」を、第2章手芸教育については、高田久子が担当。

第3章系統案編成の経路と第4章の手工科系統案の實際は、坂本数治が中心となって、「理論と實際とを両々凝視した結果…」とある。

先に述べたように、生活を基調とする手工教育の強調し、手工科の取材観では、

生活題材選択の第一に重視すべき要件に、児童の現実生活の中にあるもの、児童の現在の生活にはないが児童に付与すれば児童が興味を持って学習し得るものにして、かつ手工的価値の大なるものを掲げる。ここでは特に「木工」教材に限って抽出し考察すると、

・材料の選択と系統

木工は 尋常4年から始め、尋常6年、高等1年、高等2年と続く（この間尋常5年は竹工のみに特化、高等1年は木工と竹工）

・木工具の選択と系統

主要な木工用工具で児童各自に購入の負担させているものとして

尋常4年に「手挽糸鋸機」「彫刻刀」。尋常6年に「鉋」「木槌」「金槌」。高等1年に「両刃鋸」「のみ」「焦画器」^(注)が含まれる

・木工作法の選択と系統

尋常5年「木版の作り方」、尋常6年「板の削り方」「木取法」「木材の研磨材料と用法」「釘付法」、高等1年「製図法」「焦画の方法」「柄の作り方」「柄穴のあけ方」「木材塗飾法」「木材の接合材料と用法」、高等2年「組手の作り方」「木材印籠蓋の作り方」「木釘の作り方と打ち方」

手工科系統案のうち「木工」題材に関するすべての抽出（題材名・時数・教授事項・材料・用具の順）

尋常4年男

「テニス板」1時間 木 手挽糸鋸機 一，手挽糸鋸機は各自の負担とすること 二，購入は教師の方で取りまとめてなせ 三，テニス板の大きさは大体一定していた方がよからう 四，板はなるべく蜜柑箱の空箱など廃物を利用せしめよ

「五月人形」（男子）「人形」（女子）2時間 木 ポスタカラー又は水生色エナメル等 手挽糸鋸機 一，適当に着色させよ 二，出来上がったからお節句の日に飾らせよ 三，家からある児童には武者人形などもって来て飾らせると一層よい 四，次の教材と連絡とれ

・尋常6年男 41時間（" 57時間中）

「鉋の使用法及研磨法」2時間 一，鉋の構造及用法 二，板の削り方 三，鉋の研ぎ方 杉板 鉋（寸四）木槌 砥石 一，鉋・砥石は児童各自の負担とす 二，鉋身・鉋台の名称構造を教えよ 三，使用法の模範を示せ，研ぎ方も同じ 四，砥石についても話せ

「紙ナイフ」（女子に同じ）4時間 一，廻挽鋸の用法4時間 朴板 糊 半紙 鉋（寸四）木槌 砥石 彫刻刀 小刀 一，外形を作るとき糸鋸機は使用させず手挽糸鋸機をしようさせよ

「木札」3時間 一，両刃鋸の用法 二，木矩の用法 朴の薄板 画用紙 鉋 木槌 両刃鋸・小刀・四ツ目錐・尺度・木矩 一，工作図を書かしめよ 二，鋸・木矩使用の模範を示せ

「状差」6時間 一，木取法 二，直角小口台の用法 三，木材の研磨材料及研磨法 四，押糊の作り方と用法 朴の薄板 画用紙 押糊 直角小口台 一，正確に工作図を書かしめよ 二，削り方の順序を誤らない様にせよ 三，机間を巡視して個別指導を為し道具殊に鉋の検査を行へ 四，一部の児童のみ糸鋸機を用ひしめよ

「鉛筆削箱」6時間 一，釘付法 二，胴附合の作り方 三，罫引の用法 金槌 罫引 一，金槌を教師取りまとめて購入してやれ 二，工作図を書かしめよ

「突貫玩具」5時間 一，搔出錐付回錐の用法 二，糸鋸機の用法 三，油差の用法 四，木鑪の用法 朴又は桂の板 針金 一，先端に人形等をつけしめるもよし

「ローラースケート」5時間 朴 釘 針金 一，輪は部分品を売る店で求めさせよ

「理科実験器又は理科的玩具」10時間 塩地^註・朴・桂・栗等の類 一，理科に連絡せよ 二，体操人形等もよし

高等科1年（男子）

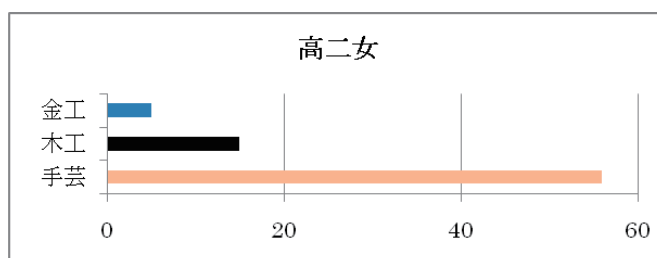
「釜敷」6時間 一，下端定規の用法 二，曲尺の用法，木鑪の用法 三，焦画の用法 四，木材の塗飾法 朴 磨研紙 塗装材料 一，着色標本により塗飾法の説明をせよ

「組本立」11時間 一，のみの用法 二，柄の作り方，柄穴のあけ方 三，胴付鋸の用法 塩地^註・桂・栗・朴の類 一，本の大きさしらべそこから出発して工夫させよ 二，安定な感じのあるものを作らせよ

「額縁」5時間 粗末な木材 釘 一，塗飾する故 木材は鋸挽のままで，組立は止接合などによらず釘付で充分である 二，大きさは画紙の大きさ実際額縁の大きさから割出させよ

「筆立」11時間 一，膠の種類・用法 二，止接合の作り方 朴 磨研紙 一，板は厚めにせよ 二，安定のあるものを作らせよ

「日光写真機」6時間 一，柱の止接合の仕方 朴 磨研紙 薬品 一，出来上がったら実際製図（前教材の筆立でもよい）等を写させよ



「動く玩具(乗物類)」13時間 ・・栗等 一, 工夫考案の態度を養いたい 二, 糸鋸機の正しい使用練習をさせよ

高等科1年(女子)

「釜敷」9時間 一, 鉋の構造及用法 二, 木の削り方 三, 鉋の研ぎ方 四, 両刃鋸の用法 五, 直角小口台の用法 朴 磨研紙 着色材料 小板(寸二) 木槌 両刃鋸 直角小口台 廻挽鋸 一, 小鉋・木槌を教師とりまとめ購入してやれ 二, 技巧方面に対して高い要求をせぬよう 三, 木工に対して面白さを味はせるやう

「糸巻」5時間 朴 磨研紙 着色材料 一, 少々厚く仕上げた方がよい 二, 木鑿使用のとき板をわらさぬように

「衣紋掛」6時間 朴 磨研紙 着色材料 一, 肩の丸みに注意させよ

高等科2年(男子)

「硯箱」10時間 塩地注)・桂の類 着色材料 一, 実と蓋の関係を充分研究させよ 二, 釘の打ち方には細心の注意を要することを知らせよ

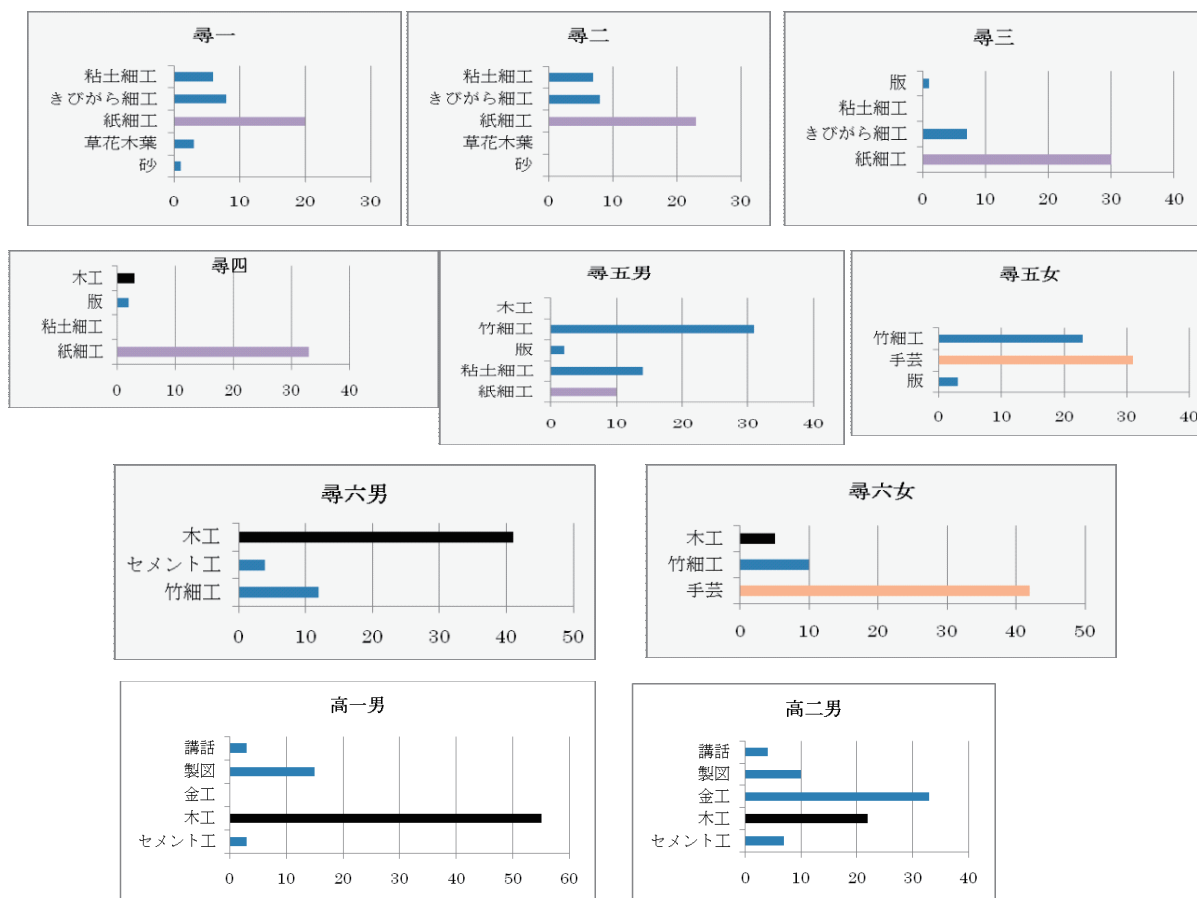
「帽子及外套掛」13時間 一, 穿孔彫刻法 二, 穿孔細工製品の装飾法 桂板 穿孔針 罫書針 一, 小さくなりすぎないやう 二, 丈夫なものを作るやう

「自由選題」14時間 一, 卒業記念力作

高等科2年(女子)

「組本立」10時間 塩地^{注)}・朴・桂・栗等の類 着色材料 磨研紙 小鉋 木矩 錐のみ 小刀 糸鋸機 一, 高一男の組本立の如く技巧方面に要求しないこと 二, 鉋の研ぎ方は相当指導せよ

「玩具」6時間 材料用具は同前 一, 簡単な人形・動物・乗り物等を作らせよ



註

- 1 大正15年の「日本民芸美術館設立趣意書」にはじまる『白樺』派の柳宗悦らの運動
- 2 加藤正育は「日本の農民美術」の中で(1)長野県小縣郡神川村の日本農民美術研究所、山本鼎の発起経営に属する系統。(2)北海道八雲の農村工芸研究会、徳川義親の発意で八雲農場の同人組織に属する系統。(3)青森県南津軽郡大光寺村の農閑工芸の系統をあげている。
- 3 山本鼎は、大正9年に本運動を考えていた。農民美術とは、農民にとって芸術的であるとともに産業的(農民の副業となる)製品を意味する。農民美術教習所を長野県佐久に作り、東京より工芸家を呼び農閑期3ヶ月間の教習の後、そこでの製品を販売した。民芸運動が日常雑器に美を見出す享受の喜びの覚醒であったのに対し、農民美術はつくる喜びを知らしめようとしたといえる。
橋本泰幸『日本の美術教育』明治図書 1994年 pp.103より引用
- 4 日本手工研究会編 前掲書 pp.2より引用
- 5 霜田静志「郷土化の図画手工」『郷土化の図画手工』学校美術協会 昭和6年 理論編pp.114-124
- 6 山本鼎 「郷土教育の指導精神」前掲書 理論編pp.11-36
- 7 板倉賛治「郷土化の図画教育総論」前掲書 理論編pp.3-10
- 8 「農村における図画工作」前掲書 指導編pp.3-32
- 9 橋本 前出書 第7章「生活画教育の時代」1 郷土教育と図画教育より抜粋
- 10 橋本 前掲書 pp.136-137
- 11 日本木材工芸協会『日本木材工芸 第1巻』 No.4 Dec1933年 pp.343-346
- 12 前掲書
- 13 前掲書
- 14 日本木材工芸協会『日本木材工芸 第4巻』 No.13 Aug1936年 pp.1129-1131
- 15 前掲書
- 16 前掲書 pp.261-288参照
- 17 岐阜県小学校校長会編纂『郷土教育年鑑』昭和8年 pp.221
- 18 岐阜県小学校校長会編纂で「国家の現状と教育思潮に刺戟せられて、岐阜県における自然と文化と社会の各方面に涉って各種の資料を蒐集編纂した」(序による)としている。調査年がはっきりしないものもある。が昭和8年当時の時勢がうかがえる。
- 19 工産物といっても、現在の電気・機械等の項目はない。三菱重工などの機械工場などもあったと考えられ、数値については、明らかにされていなかったともいえる。
- 20 芳賀編 前掲書 pp.505
- 21 『岐阜県』県別シリーズ210 郷土資料事典=観光と旅 人文社 昭和51年 pp.134
- 22 bent wood 木材に水分を与えて加熱すると可塑性が大きくなる性質を利用して、曲線・曲面状に加工したものの。または技法。M.トーネットによって工業技術的に完成された。
福井晃一編集『デザイン小辞典』ダビット社 1998年 pp.275
- 23 日下部長のもと、曲木技術を明治期から持ってきた会社で、食堂セットNo.725などヒット商品を持つ。『室内』宇佐美琢朗「家具メーカーのポリシー」参照
- 24 「よしはら-はじめ」長年飛騨産業で技術部長を務めてきた。「いつまでも自然素材におぼれることへの警告、FRP・ABS等プラスチックへの研究が新しい分野への突破口になること。新しい技術、新しいデザイン、そして生産性の開発、これらが今後の家具メーカーの大きな研究課題であること。」などをポリシーを以て実践し、多くのヒット商品を生み出してきた。(『室内』宇佐美琢朗著「家具メーカーのポリシー」より引用)
- 25 飛騨国際工芸学園 労働大臣指定専修校・文部省職業教育高度化開発研究委託校 岐阜県高山市漆垣内町3180
- 26 宇佐美琢朗「家具メーカーとデザインポリシー」『室内』工作社
- 27 葭原基「ヒット商品とデザインの模倣」『室内』工作社
- 28 「伝統的な日本美のイス」『室内』工作社より引用
- 29 沖畑康子「飛騨における版画教育の変遷」『飛騨の今昔—明治以降の新展開』カタログ 岐阜県美術館2000年 pp.112-117 当時、岐阜県美術館職員として飛騨版画教育について調査研究。

- 30 「たけだよしへい」明治25年高山市生まれ，岐阜師範卒，日本版画協会会員
- 31 沖畑 前出書 pp.114
- 32 岐阜県師範学校附属小学校では，大正時代から県下全域から優秀な訓導による研究協議会を開催してきた。大正11年開催の「図画」に続いて，昭和8年に「図画と手工」のテーマで開かれた。
- 33 第23回県下訓導協議会発表記録『図画ト手工』昭和8年2月20日発行。前半38頁に「図画系統案作製について」の下「図画教育を顧みて」，「図画系統案で構成」。後半85頁に「生活に基調する手工科系統案」の下第1章手工教育の生活指導への動向，第2章手芸教育について，第3章系統案編成の経路，第4章手工科系統案で構成されている。大正11年の第7回の研究協議会の記録輯は，参加会員による発表内容で構成されているのに対し，この『図画ト手工』は付属の訓導のみによって編集されている点で全く異なっている。
- 34 「塩地（しおじ）」トネリコ属の落葉広葉樹。タモの木も仲間で木目はやや粗く，やや軽く柔らかい。今日は著しく少なくなっているという材が，当時の木工教材として広く使用されていたことになる。
- 35 「焦画機」とは聞きなれないが，おそらく，焼きごてとか，今日のハンダごて様の，木の表面を焦がしながら文字や形を描きだす道具と推測される。
- 37 版画については
尋常3年に「芋版の作り方とすり方」1時間 注意事項 一，出来上がったものは図画の時間にも活用せしめよ 二，年賀状にも使用せしめるも可
尋常4年に「リノリウム版の作り方」2時間 版彫刻刀の用法 一，彫刻刀は児童各児負担のこと 二，年賀状の版を中心としてつくらせよ
尋常5年（男子）（女子）で「木版の作り方」2時間 朴板一，年賀状と連関させよ